

教化研究 第二五九号 抜刷
二〇一六年十二月十日

歴史家・安丸良夫と「親鸞問題」

名
和
達
宣

歴史家・安丸良夫と「親鸞問題」

名和 達宣

二〇一六年四月四日、戦後日本の歴史学において、一つのエポックを切り開いた人物が逝去した。

——安丸良夫。丸山眞男に代表される「近代化論」への批判から歩みを始め、生涯にわたり「民衆思想史」と呼ばれるフィールドを開拓し続けた歴史家である。

日本の近代化をめぐることは、突出した個人(エリート)ではなく、勤勉・儉約・謙讓・孝行といった民衆の最も広範で日常的な生活経験のなかにこそ、変革のエネルギー源が見出せるのだという「通俗道德」論を

提唱し、時代や分野を越えて、数多の研究者たちを震撼させた。いつの頃からか、その視座は苗字を冠して「安丸思想史」と呼称されるようになった。

一九七四年に発表のデビュー作『日本の近代化と民衆思想』(青木書店)をはじめ、『出口なお』(朝日新聞社、一九七七年)、『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』(岩波新書、一九七九年)、『近代天皇像の形成』(岩波書店、一九九二年)、『方法』としての「思想史」(校倉書房、一九九六年)など、「代表作」を挙げれば切りがない。多くの読者たちが、その卓越した学説のみならず、見事なまでの筆致に魅了された。まさに「巨人」と呼ぶにふさわしい人物であつた。

幸いにして、私は昨夏、安丸氏と直接対峙して問いをぶつける機会に

恵まれた。当時勤めていた親鸞仏教センターの仕事として、一橋大学近くにある自宅を訪ね、インタビューをさせていただいたのである。

無論、私が触れたのは巨大な山の一角に過ぎないが、それでも当時のことを振り返り、今、はつきりと言いつけることのできる事実がある。

——最後の安丸良夫は、間違いなく「親鸞問題」と衝突していた。

ここで言う「親鸞問題」とは、思想家の子安宣邦によって明示された視点であるが、「近代日本の知識人たちが宗教問題に直面するとき、しばしば親鸞に向かって問いが発せられ、親鸞を介して問題が深められる」という形を取る」という事態を指す(『歎異抄の近代』白澤社、二〇一四年、三三三頁)。

確かに、西田幾多郎や三木清といった哲学者をはじめ、野間宏などの

文学者、はたまた滝沢克己や吉本隆明、三國連太郎に至るまで、必ずしも真宗、もしくは仏教を立場としないう多くの「近代日本の知識人たちが」、自らの実存的な問いを親鸞に投げかけ、また親鸞を介してその問いを深めている。

安丸氏に関して言えば、自らの「親鸞問題」を直接的に語った著作は、まだ公刊されていない。しかし早い段階から、真宗が民衆の信仰生活の内面に深く根を下ろしている点や、そこから生まれる宗教的自律性が、日本の近代化を基底部で支えていた点(「宗教の自由」の実現など)を評価し、あるいは「宗教的『近代』の模索」の代表として清沢満之とその門下による「精神主義」運動に着目している。また、比較的新しい論文集『文明化の経験——近代転換期の日本』(岩波書店、二〇〇七年)に

所収の「砺波人の心性」(初出は二〇〇三年)では、自らの研究が真宗篤信地域である故郷(富山県東砺波郡、現・南砺市)での「経験的な知識」に根差していると告白している。

さらに、二〇一〇年に発表の論文「黒田俊雄の中世宗教史研究——顕密体制論と親鸞」(戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆 山川出版社)では、戦後日本のマルクス主義歴史学を代表する研究者・黒田俊雄を介して、間接的ながらも親鸞を論じている。そこでは同郷出身である黒田の研究活動の背景には、真宗と密接に関わった「生活史的背景」と「親鸞への思い入れ」があつたと述べているが、それはそのまま自身の学問背景を指摘したもののように映る。

また、最後の章には「親鸞問題とは？」という表題が付けられ、平雅行の研究を手引きとしながら「悪」

の問題に関して積極的な考察を加えている。そして本論文の結びでは、親鸞の思想が近代日本の知識人に与えた影響の焦点を「人間悪の根源性の問題」という一点に見定め、次のような視座を提起している。

人間の根源悪という否定性を介してこの世界の全体性に向き合おうとするとき、私たちが親鸞を想起してしまうのは、当然の成り行きではなからうか。そして私たちが、親鸞の思想圏をなすにほどこか分節化された別の言葉に置き換えてゆくことが可能になれば、私たちの思想はその分ゆたかになり、見通しのよいものになってゆくのではないかと思う。(三三一頁)

私が安丸氏にぶつけた問いは、ここで暗示されている親鸞思想の課題と可能性についてであつた。次に示

すのは、訪問する約一週前に、私から送ったメールの一部である。

私自身はこの文を、黒田氏における「親鸞問題」であると同時、安丸先生ご自身における「親鸞問題」として読ませていただきました。ここで黒田氏と親鸞との関係について、必ずしも表層で取り上げられることなく「歴史家としての探求に終生つきまとい、黒田を規定し続けた」と指摘されていますが、実は私自身が先生の諸論考を読むなかできわめて近い「手ざわり」のようなものを感じておりました。つまり「日本の近代化と民衆思想」をはじめとする「通俗道徳」論、あるいは「現代日本における「宗教」と「暴力」」などの現代の問題を扱われた論考を読んだとき、常

に根底に流れているように感じるのは、親鸞あるいは真宗の問題でありました。

今から読み返せば不遜きわまりない文面であるが、このような門外漢かつ若輩者からの問いかけに対し、安丸氏からは、親鸞の思想に絞るよりも「自分の人生史に即した回り道」をする方がやりやすい、という意向とともに、次のようなテーマ設定案が送られてきた。

一、私の出自と育ち。私の家族は真宗大谷派門徒の末流にっらなるものなので、家族と地域の宗教状況を話して、自分のものの考え方の背景説明とする。

二、歴史研究者としての問題意識の特徴や方法論。ここでは「通俗道徳」論や天皇制など。
三、親鸞宗教思想の現代的意義。

ここではかつて黒田論などで触れたよりももう少し具体化して、現代の問題状況から例を引きながらこの主題に近づいてみる。

約束の日、私は同僚の大江覚成事(当時)とともに安丸氏の書齋を訪ねた。氏は最初に、私たちが何者であるのか(出身地や僧籍の有無など)を尋ね、その後、あらかじめルーズリーフ数枚にまとめていた原稿を読み進めるかたちで、およそ二時間半にわたってゆっくりと、時には雑談を交えながら上記の三点を中心に話をされた。特に、自身の研究史において大きな転機となった「通俗道徳」論について、その背景には大本教の教祖・出口なおの研究と故郷での生活体験という二つの契機があったと改めて明言されたことは、色濃く脳裏に焼きついている。

そして、三点目のテーマ「親鸞宗教思想の現代的意義」に関しては、サルトルの「実践的惰性態」⁽³⁾という概念を軸に、地球温暖化(CO2の削減)やテロ・戦争の問題、あるいはピケティの理論に基づく経済格差の問題などを踏まえながら話を進め、最終的に「悪の必然性」という観点を切り口に、親鸞の思想へと帰着していかれた。少々長くなるが、その核心と思われる部分を以下に記す。

親鸞の思想を一応、自然法爾の思想というように考えますと、そこでは悪の必然性ということが根源的な意味をもっていると思うのです。善悪が宿業である、あるいは業縁であると。親鸞の時代でも現代でも、例えば人を殺すということを、普通われわれは日常的にはすることはないと思うのです。しかし

(中略) よく考えてみれば人間はいつも人を殺すような存在だとも言える。そういう捉え方をするためには、全体として捉えるということが必要だと思うのです。例えば地球の温暖化ということは、地球のどこかのところでは国そのものが水没してしまっただけでなく、重大なことで、それは殺人と言えれば殺人なわけですけど、でもそれはわれわれが普通そういう殺人として意識することは無い。そして人間はだいたい皆、自分は多少悪いところもあるけれども根本的にはそんなに悪い人間じゃない、善人の方だと思っっているわけですね。しかし、全体として捉えてみた場合、われわれの日常性のなかに、殺人にしろテロにしろ破壊にしろ、そういう重

大な結果をもたらすようなものが含まれているということになると思うのです。それがつまり業縁とか宿縁というものであって、そういうものを捉えるためには物事を世界全体の連関のなかで捉えなければならぬのだということだと思っのです。

(中略) 悪というものが現代の日本人にはあまり切実なものとしては体験されたことがない、自分の体験としては経験されたことがないので、他人が突然犯して驚くという、そういう他人事として存在しているわけですね。でも、宿業とか業縁というものを媒介にして考えると、われわれのなかにそういう悪に対する不可避性のようなものが深く宿っている。ただ運が良くて、たま

教化研究

特集 宗門の歴史に学ぶ

巻頭言 僧伽としての宗門の歴史に学ぶ……………安 富 信 哉 (2)
特集にあたって……………(6)
研究班報告
『真宗と国家』の意義と発刊の背景……………新 野 和 暢 (10)
『見真額』に関する学習資料集「大師号」&「勅額」作成報告…鶴 見 晃 (20)
大谷派宗門(明治期)の課題—『関根仁応日誌』を通して—…名 畑 直 日 児 (30)
研究論文 宗憲と日本国憲法—大谷派の戦後史— ……藤 井 祐 介 (48)
フィールドワーク報告 地域真宗史研究の可能性…松 金 直 美 (69)
講義録 親鸞聖人と相模国……………今 井 雅 晴 (81)
特集 教如上人四百回忌法要……………(109)
記念法話 四月二日(火) 初逮夜……………青 木 馨 (111)
四月三日(水) 日中……………上 場 顕 雄 (117)
四月三日(水) 逮夜……………草 野 之 之 (123)
四月四日(木) 結願日中……………大 桑 齊 (129)
研究ノート 教如上人四百回忌私観……………御 手 洗 隆 明 (138)
講演録 現代に生きる仏教……………寺 島 実 郎 (150)
研究論文 『浄土論註』における「無生之生」について…本 明 義 樹 (174)
—往生思想形成の背景と課題—
梵響 雑 感……………相 良 晴 美 (44)
東京教区内に伝わる親鸞聖人の足跡……………嵩 海 史 (105)
お斎から考える郷土食の意義……………清 綯 (146)
研究余話 歴史家・安丸良夫と「親鸞問題」……………名 和 達 宣 (194)
相模の御旧跡を訪ねて……………御 手 洗 隆 明 (199)
本の紹介・執筆者紹介・研究所雑記・編集後記

真宗大谷派

教 学 研 究 所

たましてないだけのこと、根本的な悪というものはやはりわれわれの日常生活のなかにあるという考え方になるのではないのでしょうか。

(傍点は筆者による)

ここで示されているのは、善悪を単純に二元的に分けて考えるのではなく、あらゆる人間の日常性のなかに根源的な悪があるという、親鸞思想の基本とも言うべき視座であるが、そのことが「全体として捉える」とも言い換えられる。

「全体」というのは、安丸思想家を読み解くうえでのキーワードであり、なおかつ必ずしも明確に定義づけのなされていない概念であるが、それが親鸞への深い共鳴とともに繰り返し発せられた。

私は氏と対峙するのに先立ち、あ

をかき集め、その思索世界に沈潜しようとする。その際、当然ながら「全体(性)」という語を何度も目にし、それなりに咀嚼したつもりでインタビュアーに臨んでいた。

ところが、この時、実際に耳にした「全体」には、驚くほど極端にアクトメントが付され、強烈なインパクトをもって文字面とは違った響きで迫ってきた。そして終了後には、少しはかみながら「あなたに挑戦状を叩きつけられたものだから、地球温暖化やビケテイのことなど、色々勉強し直しましたよ」と言われた。その一言を聞いて、なぜか腰が抜けたような感覚におそわれ、残響をたもったまま現在に至る。

和辻哲郎による漱石評の謂いを借りれば、私の体感した歴史家・安丸良夫は、まさに「その遺した全著作よりも大きい人物⁽⁵⁾」であった。

註

(1) 代表的な論考に「天皇制下の民衆と宗教」(岩波講座日本歴史近代3、一九七六年)など。

(2) 当初は、安丸氏と私たちとの間を架橋してくれた同年代の門下生・繁田真爾氏も同行する予定であったが、急な事情により、やむを得ず欠席された。

(3) サルトル『弁証法的理性批判』のなかで提示された、人間が形成したものでありながら人間を規定・支配する情性的な土台のこと。

(4) インタビュアーの概要は、親鸞仏教センターのホームページに掲載。

(5) 和辻哲郎『埋もれた日本』(和辻哲郎全集)第三巻、岩波書店、一九六二年、四一八頁。